

ヨナ書 4章「怒りとあわれみが出会う場所」

4:1 ところが、このことはヨナを非常に不愉快にさせた。ヨナは怒って、

4:2 【主】に祈って言った。「ああ、【主】よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか。それで、私は初めタルシシュへのがれようとしたのです。私は、あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわざを思い直されることを知っていたからです。

4:3 【主】よ。今、どうぞ、私のいのちを取ってください。私は生きているより死んだほうがましですから。」

4:4 【主】は仰せられた。「あなたは当然のこのように怒るのか。」

4:5 ヨナは町から出て、町の東のほうにすわり、そこに自分で仮小屋を作り、町の中で何が起こるかを覗きわめようと、その陰の下にすわっていた。

4:6 神である【主】は一本のとうごまを備え、それをヨナの上をおおうように生えさせ、彼の頭の上の陰として、ヨナの不きげんを直そうとされた。ヨナはこのとうごまを非常に喜んだ。

4:7 しかし、神は、翌日の夜明けに、一匹の虫を備えられた。虫がそのとうごまをかんだので、とうごまは枯れた。

4:8 太陽が上ったとき、神は焼けつくような東風を備えられた。太陽がヨナの頭に照りつけたので、彼は衰え果て、自分の死を願って言った。「私は生きているより死んだほうがしました。」

4:9 すると、神はヨナに仰せられた。「このとうごまのために、あなたは当然のこのように怒るのか。」ヨナは言った。「私が死ぬほど怒るのは当然のことです。」

4:10 【主】は仰せられた。「あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜しんでいる。

4:11 まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」

はじめに

2015年に公開された映画「セッション」に登場するジャズ指導者テレンス・フレッチャーは、若きドラマー、アンドリュー・ニーマンを一流に育てあげなければと必死になります。けれども、その指導ぶりは非情です。フレッチャーは、アンドリューを追い込み、痛めつけました。なぜでしょう。一流のジャズミュージシャンを輩出することで、指導者として認められたいという潜在意識に駆り立てられていたからです。けれども、行き過ぎた指導が原因で、結局彼は職を失います。認められることへの執着によって盲目になった彼には、素晴らしい音楽も若いミュージシャンたちの才能も無価値のように思えました。それは結局、自己中心のせいです。

ここ4章で、ヨナにも同じようなことが起こっています。彼は自分のことばかり考えていて、ニネベで練り広げられる素晴らしい神の御業が見えません。神のなさったことは、ヨナ自身の目標や野心と重ならないものでした。これにヨナは大きく反応します。そして、ヨナの怒りと神のあわれみが出会った時にどうなったか、これから学んでいきます。

考えてみてください。ヨナは自分の使命を果たして大喜びするはずでしょう。これまでの人生で最難関と思われる人々、おそらく受け入れてくれなさそうな人々に神のみことばを告げました。すると彼らは、驚くほど素直に悔い改めました。けれども今度は、ヨナが激怒しています。その怒りに示されているのは次のことです。

I. あわれみの罪 (1-4 節)

- a. ヨナの怒りがどのように表現されているか注目してください。
- i. 新改訳では、「非常に不愉快にさせた」とあります。新共同訳には、「大いに不満で」とあります。どちらも、ヘブル語が語っている内容をずいぶん上品に訳しています。
 - ii. ヘブル語では実際には、神がニネベに対する災いを思い直されたことをヨナが「大きな悪」だととらえ、「怒りを燃やした」とあります。さて、ここで「悪」と表現された単語は、ニネベの邪悪さを示すためにこの書全体で使われたのと同じ単語です。その言わんとするところがわかりでしょうか。ヨナから見た神のあわれみは、神から見たニネベの悪と同じくらいひどいということです。ヨナは、ニネベの罪を憎むと同時に、神のあわれみに怒りを感じています。神が激しい怒りをおさめられた途端にヨナが怒りを燃やしたというのは皮肉なものです。
- b. この短い一文の後に、この書でふたつめのヨナの祈りが登場します。けれども、これは 2 章にあった祈りとはずいぶん違った祈りです。これは、ヨナが最初からずっと神にぶつけていた不満です。なぜ彼が最初に神から逃げたかについてです。
- i. その理由とは何でしょう。それは、神があわれみをかけられるとヨナがわかっていたからです。ヨナは、「最初からそうなると言ったではないですか。こうなることはわかっていました」と文句を言っています。
 - ii. そして、怒りに任せて、出エジプト記 34 章の神ご自身のみことばを神に対して引用します。これはおそらく、神がどういうお方であるかを宣言する聖書でもっとも有名な個所でしょう。その個所をお読みします。
 1. 「【主】、【主】は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、 34:7 恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」（出エジプト 34 : 6-7）
 2. 2 節後半のヨナの言葉を見てください。出エジプト記のどの部分が欠けているのでしょうか。罰すべき者は必ず罰するという部分です。
 - iii. ヨナはみことばを部分的に引用して神を責め、自分は怒って当然だと自らを正当化しました。神を優しい愛のお方と決めつけ、神の義については都合よく忘れていきます。そして、愛と義という神のご性質を切り離そうとしています。しかし、このふたつは切り離せないことを、私たちはこの数週間で学びました。
 - iv. ここでヨナは、神の契約の御名も用いています。新改訳聖書で「主」と太字で表記されている部分は、ヘブル語の「ヤウエ」という神の御名が使われている個所です。これは、神がイスラエルの民に啓示された契約の御名です。そして、神に不平を言うときにこの御名を使っているところにとげがあります。神がご自身の民を守るという約束に縛られていると強調しているのです。神の民を滅ぼそうとするような敵を赦して、どのようにして民を守るのか、ということです。
 1. 神はご自身の民を忠実な契約の愛で愛されます。その愛を指す特別な単語「ヘセド」もここに登場します。ヨナは、イスラエルを脅かす敵に対してそのような尽きない愛が差し出されることに驚き、憤慨しました。同胞以外の人々にも恵みが提供されることに抗議したのです。
- c. ヨナはその祈りを、衝撃的な結論で締めくくります。「今、どうぞ、私のいのちを取ってください。私は生きているより死んだほうがましですから。」ヨナは、ニネベが神に赦されるのを見るぐらいなら死んだほうがましだと言うのです。神がニネ

べを生かされたから、自分は死にたい、というわけです。神こそヨナの生甲斐であるべきでしたが、彼が神以外の何かをもっと大切にしていたことが、この反応からわかります。

- i. 客観的な立場から、ヨナの心を毒していたものが何かを考えるのは簡単ですが、私たちの心も、神以外のものに支配されている場合があります。
- d. ヨナの問題は愛でした。意外でしたか。彼は、何かを深く愛したことで、優先順位や価値観が歪んでしまったのです。その何かとは、祖国と同胞です。その愛が、外国人に対する憎しみへと曲がっていきました。
 - i. つまりこういうことです。ニネベが悔い改めたことは、神にとって喜ばしいことですが、イスラエルにとっては脅威でした。アッシリヤはいずれ、北王国であるイスラエルを滅ぼします。ですから、ヨナの不安は理解できる部分もあります。けれども、ヨナ書では一貫して、神が預言者ヨナに選択肢を突きつけられます。イスラエルの安泰か、邪悪な人々の悔い改めと救いを見るという神のみこころか、という二者択一です。
 - ii. ある注解書は次のように解説します。「愛国心は良いものであるが、その愛国心が、ある国民全体を霊的に失われたと声高に言わせるなら、神より祖国を愛していることになる。それは、偶像礼拝である。」
 - iii. どの国も、歴史のいつかの時点でこのような経験をしています。けれどもそれは、無数の事柄のひとつにすぎません。ヨナの反応は、私たちにとって何が偶像礼拝の対象であるかを突き止める助けになります。
 1. 誰でも、自分が崇拜するものに感情も支配されます。ヨナは明らかに怒りを爆発させ、傷つきやすい状態でした。そこから、根の深い偶像礼拝があることがわかります。皆さんはどうでしょう。何に対して、「爆発」したり、過剰に不安になったりしますか。もし取り去られたら、生きる意味がなくなってしまうと思うものは何ですか。それは偶像礼拝の確かなしるしです。それらのものに対してどう反応するかが、通常の愛情なのか、偶像になってしまっているかを見分けさせてくれます。

神のあわれみに対するヨナの極端な反応から、ヨナが一番大切にしていたものがわかりました。神のあわれみに対して彼が腹を立てたことで、彼の本当の動機が見えてきました。私たちにも同じことが言えます。私たちも何かに対して過剰反応するなら、それは私たちの偶像が脅かされているからです。けれども、神は状況を用いて、ヨナに彼自身を見つめさせ、教えてくださいます。

II. あわれみの教訓 (5-8 節)

- a. ヨナが祈り終わると、神は「あなたは当然のこのように怒るのか。」と優しくはっきりと尋ねられます。これに対してヨナは、町から出て、その東のほうで、町に何が起こるかを見ることにしました。宣教師なら誰でも、ヨナの立場にいられたなら、ニネベが生ける神とつながる第一歩を踏み出したことに大喜びするでしょう。そして、ニネベの人たちが成長できるように教え、助けようと待ち構えるでしょう。けれども、人々がヨナの言葉に応答したというのに、ヨナは怒って町を去りました。
- b. この時、神はヨナを荒野に置き去りにしてもよかったのです。このような反抗的で怒りに満ちた預言者にさじを投げることもできました。けれども神はヨナをあわれみ、とうごまと虫と焼けつくような東風を用いて、教えてくださいます。
- c. 神がとうごまを生えさせられたのは、彼の頭の上の陰として、ヨナの不きげんを直そうとされたからだとあります。ここで「不きげん」と訳された単語は、1 節に登場した「悪」を意味する単語です。神はヨナをかわいそうに思われました。そのよ

うなあわれみを受ける資格はヨナにはありません。皮肉なものです。ヨナは、あわれみを受けて喜びますが、ニネベがあわれみを受けると、怒りました。ここで気づいてほしいことがあります。神は忍耐をもってヨナに応じられます。憎しみと独善でいっぱいヨナを、神は不快な暑さからだけでなく、罪深い心の悪からも救おうとしておられるのです。

- d. そして、厳しいあわれみをもたらすことによって、そうなります。とうごまが生えてヨナが日陰に入れたと思った矢先、虫がついてとうごまは枯れました。
- i. これは、神がヨナの人生にもたらされた数々の失望のひとつです。最初に使命を言い渡されて心が乱されたときから、荒れ狂う嵐、大きな魚、ニネベの人々の悔い改め、と神は失望をとおしてヨナを追いかられます。そしてここで、神がヨナの心によりやく到達されるためには、彼の愛するものが枯れて死ななくてはなりません。
 - ii. ここにいる私たちも皆、何らかの失望を経験したことがあります。夢破れたり、愛する人を失ったり、大切な物をなくしたり、描いていた未来が突然または徐々に遠のいたり。ヨナにとってそうだったように、このような出来事は、神が私たちの心の偶像を取り除く霊的な手術をしておられるしるしです。
 1. 17世紀の有名な英国人クリスチャン、ジョン・ニュートンが書いた賛美歌に、「成長させてくださいと主に求めた」というものがあります。その歌詞には、ヨナが喜んだものが枯れて取り去られたというヨナ書のこの部分を抜粋した内容があります。この賛美歌では、あるクリスチャンが信仰と愛と恵みにおける成長を祈り求めます。そして、祝福のうちに神がすぐに祈りに応えて安息を与えてくださるだろうと期待します。
 2. しかし実際には、神は、彼の心の中にある秘めた悪を見せ、彼が慎重に立てた計画をふいにし、彼を低い立場に追いやられます。そして彼は神に叫んで尋ねます。「なぜこのようなことをなさるのですか。私は信仰と恵みにおける成長を求めたのに、あなたは試練と失望だけをお与えになりました。」
 3. それに対する神の答えは次のとおりです。「私が用いる内なる試練によって、あなたを自己と誇りから解放する。地上の喜びをもたらす計画を破るのは、あなたがわたしのうちにすべてを見いだすため。」
 - iii. 試練をとおして、恵みと信仰を求めたニュートンの祈りに神は答えておられました。神は彼を支配していた物事から解放されたのです。神がニュートンに教えておられたのは、彼が心から求めた自由と平安は、神を何よりも愛し、神を自分のすべてとすることによってのみ見いだせる、ということです。
 - iv. ヨナにとっても私たちにとってもなぜそれが必要なのでしょうか。それは偶像礼拝が知性以上に心の問題だからです。心が愛するものを意志が実行し、知性が正当化します。宗教改革者ジャン・カルヴァンは、人の心は「偶像工場」だと言いました。教父アウグスティヌスも、私たちの問題は、悪い行いをする以上に根深く、悪を愛することだと言いました。ですから、私たちに必要なのは意識改革ではなく、心の変化です。そして、神がそれを成し遂げられる最善の方法が、偶像による私たちの心の支配を破ることである場合があります。その過程で、私たちの心は痛むでしょう。けれども、そうすることで、神が私たちの心の主となられるのです。曲がったままくっついた骨を矯正するために再度骨折させなければならないことがあります。私たちの心も同じ

で、偶像と深く絡み合った心は、癒やされるためにまず砕かれなくてはなりません。

とうごまが生えて枯れたことからヨナが学べるのはこれだけではありません。神は、ヨナの心をあらわにただけでなく、疑問を投げかけられます。

III. あわれみの質問 (9-12 節)

- a. とうごまが枯れ、太陽がヨナの頭上を照り付けると、ヨナは 3 節と同じセリフを繰り返します。死にたいと言うのです。けれども神は、これに対して 4 節と同じ質問をヨナに投げかけます。「このとうごまのために、あなたは当然のことに怒るのか。」するとヨナは「私が死ぬほど怒るのは当然のことです。」と答えます。お笑い種です。
- b. けれどもこの後、神は最後の教訓をヨナに教えられます。
 - i. ヨナに質問を投げかけられた中に、神のあわれみが示されているのですが、その理由がここでわかります。ヨナの姿勢はずっと変わっていません。「ニネベをあわれむとはどういうことですか」という態度です。けれども神はここでおっしゃいます。「ニネベをあわれまないとはどういうことか。神に似せて造られたたくさんの人々のいる町よりも、大したことのない植物のほうが大切なのか。その町の人々は、神のみことばを伝える預言者がいなければ、罪によってさばきと滅びに向かって突き進んでいくというのに。そんなことは断じて許されない。」
 - ii. 11 節で「人間」と訳された個所で、神は特別な意味を持つヘブル語「アダム」を使っておられます。これは人類を指します。神がご自身に似せて人類を男と女に造られたとき、創世記 1 章で使われた単語です。おわかりでしょうか。神は、各々の人がどれほどあわれみにふさわしいかという観点ではなく、人が神のかたちをしているという事実に基づいて、ヨナに訴えかけています。ヨナは間違った物差しで人をはかっていた。そして、優先順位を完全に間違えてしまいました。彼は、愛国主義という自らの偶像を脅かすものという物差しでニネベの人々をはかっていたのです。一方、神はニネベの人々を神に似せて造られた被造物という観点ではかられました。ここがポイントです。神のかたちをしている事実に階級はありません。身分の高い人も低い人も、裕福な人も貧しい人も、すべての人が神に似せて造られています。出身地も、民族も関係ありません。神は言われます。「あなたに植物をあわれむ心があるなら、わたしは人間をあわれむべきではないだろうか」と。
 - iii. 神は町にいる人々の数を挙げておられます。これは「あわれみの数学」と呼べるでしょう。都市部には、地球上のどの場所よりも神のかたちの被造物が多く存在するのです。ただしそれは、郊外や遠隔地に福音の必要性が低いということではありません。このことについて少し考えてみましょう。
 1. 先週、教会のある兄弟が、私と両親を淀川の花火大会に連れて行ってくれました。花火はとてもきれいでしたが、あんなに混雑した場所を見たのは初めてでした。60 万人の人が堤防の辺りに集まっていたそうです。大阪市だけでも人口は約 270 万人です。神はその人たちのことをどう思っておられるでしょう。
 2. 今月中旬にはお盆があり、多くの日本人がよくわからない、それほど信じてもない儀式に参加しました。その人たちは、霊的に右も左もわきまえない人たちです。生ける神とのかかわりかたも、人生の生き方もわかりません。そんな人たちに、私たちはあわれみをも

って接し、偉大な救い主なる神について知らせるべきではないでしょうか。私たちもかつてはそのようでした。けれども、神は私たちをあわれんでくださいました。皆さんは、神の家族以外の人とつながりを持っていますか。信仰を同じくしない人たちとどれだけ深くかかわっていますか。

- iv. あわれみを示すにはつながりが必要です。ここで使われたあわれみを示す単語は、誰かに対する同情で涙が出る状態を意味します。あわれみとは、誰かとともに苦しみを共有することです。これは愛情の言葉です。神は人も物も必要とはされません。けれども、主権をもって、自発的に、人々に心を寄せ、悲しみをともにすることを選んでくださいます。

1. 多くの人々に対するこのような驚くべきあわれみが、イエスというお方のうちに示されました。イエスは、座ってエルサレムをご覧になりました。エルサレムも、預言者を殺し、遣わされた者を石打ちにする邪悪な町でした。そんな町をご覧になったイエスは、激しい怒りを燃え上がらせる代わりに、町のために涙を流されました。（ルカ 19：41-42、マタイ 23：37）そしてその町のために十字架にかかり、「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」（ルカ 23：34）と祈られました。お分かりでしょうか。イエスは、さらに偉大な真のヨナだったのです。神はあわれみによって受肉というかたちで私たちとつながられました。イエスは「悲しみの人」と呼ばれました。それは、私たちの悲しみを負われたからです。私たちのそばに来られ、私たちの病がうつるほどに近くに来られました。

ここまでで学んだのは次のとおりです。私たちの偶像は、神のあわれみを感じさせなくします。けれども、神は私たちを試練や失望をもって追いかけてくださり、偶像が何であるかを明らかにしてくださいます。さらに、イエスにおいて究極の方法で、私たちに対するあわれみと愛を示してくださいます。

まとめ

ヨナの最後は中途半端な状態で終わります。話を決着させるにはまだ続きがあるはずだと思わせるような終わり方です。この書の最後には、神の問いかけがこだまします。もともとはヨナに投げかけられた問いですが、ヨナはこの書の最後にはおらず、この問いが最終的には私たちに向けられていることに気づかされます。

さて、あなたは何と答えますか。